

住まいづくりを考えているあなたへ。

感性を磨く

Lesson 4 花を知る、花と暮らす

対談 理学博士。東京大学名誉教授 **大場 秀章氏**
OGGI JAPAN INC. 代表取締役 **田村 文子氏**

「花はたくさんあるのに、花のある暮らしが少ないのは残念です」
（田村）
「花という自然を受け入れるのは覚悟が必要です」
（大場）

田村 日本では、毎日の暮らしのなかで花を楽しむというスタイルをもつ人が少ないような気がします。自分のために一束の花に散財することを、惜しんでしまう。
大場 日本の植物は多様性に富み、四季折々にさまざまな花が見られるので、求める意識がもともと希薄なのかもしれません。

「花には文化を動かす力がある」
（大場）
「花を知ればさまざまな南国の人と語らえる」
（田村）

大場 花の歴史的背景を知るとは、異文化を理解する手がかりにもなりま。とくにバラがそうです。
田村 私もバラ好きですが、多くの人が花と聞いて思い浮かべるのは、やはりバラではないでしょうか。宗教と文化の背景にバラがあるヨーロッパの人々なら必ずと見えるかもしれません。

もしれません。わざわざ買わなくても、と。また、家の中に花がなくて窓の外に目をやれば、隣家の木立が借景になる。しかし、かつて身近に見られた植物は、今、とくに都市部では姿を消してしまいました。窓の外を見ても隣家の壁。だからこそ花を求め、新しい関わり方を考えなくてはならない時なのではないでしょうか。

田村 ところが、あちらこちらでガーデニングがブームになり、素敵な花ライフが話題になったのも束の間、土で建物が汚れるのを嫌い、また剪定、雑草の手入れが難しいこともあり、地面を玉石で覆ったり、コンクリートを打ってしまったということが少なくありません。

大場 自然というのは、きれいだけではありません。ごく身近に接したときには汚いものです。自然を受け入れるということは、多面性につきあうことと意識しなければ、とんでもないことになります。

田村 実際に、桜の木ひとつとっても、花びらの始末、虫の発生など、ご近所とのいざこざになりかねません。

大場 落ち葉が散らかって迷惑だから切つてほしいとか。

田村 植物との共存を考えるより、景観が崩れることを嫌い、楽しむどころか、排除することを考えてしまう。

大場 植物に恵まれてきたから有難みが分らず、逆に迷惑な存在と思われているのかもしれない。一般に、日本人は自然を大切にするといわれているけれど、そんなことはないと思う。自然が豊かだったから特別には考えず、むしろ粗末に扱ってきたことを反省しなければいけないですね。



大場秀章 Hideaki Ohba

理学博士。東京大学名誉教授。専門は植物分類学。著書は「江戸の植物学」（東京大学出版会）、「バラの誕生」（中央公論社）、「森を読む」（岩波書店）、「道端植物園 都会で出会える植物たちの不思議」（平凡社）ほか多数。ヒマラヤ地域、中東などにおけるフィールド研究も有名。

田村文子 Fumiko TAMURA

OGGI JAPAN INC. 代表取締役。30余年、アクセサリー製造小売業に従事。現在、全国主要都市60店舗にて、ブランド「OGGI」を展開。世界に向けた独自の情報網をもち、「おしゃれ」の観点から、衣食住にわたる生活空間のプロデュースを手掛けている。

でに広まったら考えられます。
田村 私は、バラには美学のもと、といえるものがあると思います。園芸や室内装飾だけでなく、絵画、デザイン、音楽、文学などさまざまな分野において、バラほどモチーフになってきた花はないように思います。
大場 そのとおりです。美学がバラを花のなかの花にしたのではなくて、文化というのがバラを基準にして組み立てられてきたといったほうがいい。バラが好きという人には、本当にバラが好きの人だけではなく、バラの文化が好きな人もいます。

田村 私がいくらバラ好きだからといっても、四六時中眺め匂いをかいでいると、少し休みたくります。私たちが日本人は本来、自然の摂理になかった花との関わり方を求めているのではありませんか。持ちがよすぎる花、プリザーブドフラワーのように枯れない花には、どこか違和感がある。

「花のお付き合いは、
気負わずに」
（田村）

「心のふるさとに咲く
花を大切に」
（大場）

大場 意識するかしないかは別として、やはり自分を育んだ母体となる土地の自然、「ふるさと」というものが与える影響が大きいと思います。今、私たちは温室のような家をつくり、国境を超えたいろんな地域の花を集めてそこで栽培する。しかし、ふと、自分のなかに形成された自然観と照らし合わせた時、どことなく違和感が生じるわけです。だから、いくら美しくてもバラだけを見ているのでは満たされない。
田村 私は以前、家中をバラのドライフラワーでいっぱいにしたことがあります。ある日、ふと愚かさに気づいて、すべてを整理しました。
大場 そうしたら、以前よりもバラが好きになったのではないですか。
田村 そうです。バラの中に埋もれるようにして暮らしているときにはわからなかったバラの美しさが、わかるようになりました。
大場 大量のバラよりも、1本のバラのほうが、田村さんの原風景にマッチしたんですね。日本人にはまた、野の花を愛でるといって特有の感性がある。海外を旅して、道端に咲く小さな花にも目をとめ、可愛いと思うのは日本人だけかもしれません。小さいもの、目立たないもの、いろんなところに美を見出すことができる。ブームになったイングリッシュガーデンが、じつは日本人の感性、自然観を取り入れたものであることは、案外知られていないようです。
田村 日本の花文化というと、生け花ばかりが紹介されますが、日本人ならではの花への感性を忘れずに、形にとられることなくもつと気楽に花と関わることをお勧めします。生活空間を少しでも広くとるために、花瓶を置くスペースまでも削ってしまう方が多いけれど、シンプルな住まいこそ花が映え、花があるだけで広さ以上の豊かさをもたらされることを知ってほしい。
大場 自然があるのが当然ではなくってしまつたこの時代だからこそ、日本人として受け継いできた花への感性を大切にしながら、新しい花との関わり方、花文化というものを生み出せたらいいですね。



協力/OGGI JAPAN INC. <http://www.oggi.co.jp/>

撮影/君塚裕



喫茶ルオー（東京・本郷）にて